

私達を取り巻く環境は日々変化しています。最近の環境問題や、環境に関する事柄について「知ってほしい・知らせたい」情報などをこのコーナーで伝えていきます。今回は、「人工物量と生物量」「洋上風力発電」の問題です。

### ◆人工物量と生物量

私たちの周りには様々なものが溢れている。中には「本当にそれいるの？」というようなものもあるかもしれない。しかし多くの“もの”たちは、私たちの生活を支え、豊かに、そして便利にしてくれている。

しかしプラスチックや、コンクリート、アスファルトなど人間がつくり出したこれら“人工物”の重量が、植物や動物など“生物”の重量(1.1兆トン)を上回ったというから驚きだ。先ほど報じられた英科学誌ネイチャーの研究チームの発表によると、20世紀初頭の人工物量は生物量の3%だったが、第2次世界大戦後都市開発などで人工物量が急増し、他方、森林伐採や、土地利用の変化などで生物の量は減少し、人工物量は現在も年300億トンずつ増えており、このままでは2040年には人工物量は生物量の3倍を超えるという。

脱炭素の視点からも、今一度ライフスタイルを真剣に見直すときではないだろうか。手遅れになるその前に。

### ◆洋上風力発電

世界の潮流が脱炭素社会へと動く中、日本のエネルギー政策は今どうなっているのだろうか。昨年菅総理が「2050年までに、温室効果ガスの排出を全体としてゼロにする。すなわち2050年カーボンニュートラル、脱炭素社会の実現を目指す」ことを宣言した。

今年は2050年温室効果ガスゼロに向け、実質的な取り組みがスタートする年である。

政府はその実行計画で、エネルギーの電化を進め、再生可能エネルギーを最大限導入しその切り札として洋上風力発電の大型火力発電45基分の導入を打ち出した。毎年100万kwずつ増やし、2030年に1000万kwに、そして、2040年には3000万から4500万kwにまで引き上げる目標を打ち出した。しかし実現にはかなりの困難が伴う。だが、これぐらいしないと2050年の実質ゼロは到底達成できない。

政府の計画を進めるには、専門的な人材育成も不可欠であり、この点に関しても政府の具体的な計画が求められる。こうした状況を背景に、洋上発電先進国からの売り込み攻勢が起きている。いずれにしても、温暖化対策は待ったなしである。